

ご支援くださったみなさま

ベシアナがコソボに帰ってから、7ヶ月余りが過ぎました。みなさまに支えられ、頭部の治療が順調に進んでいますことを心から感謝申し上げます。みなさまには多大なご支援を受けながらご報告が遅くなりましたこととお詫び申し上げます。

今回、「ベシアナちゃんを助ける会」のいままでの活動報告と会計報告を同封いたします。また、この9月からベシアナは小学校に入学しました。その様子が地元の新聞に載りましたので、そのコピーと訳をお送りします。ご査収の程よろしくお願いいたします。

私がベシアナに会ったのは、1999年11月でした。コソボにいる日本人の方々がベシアナを支援しようと話し合っていたころだと思えます。顔をあげようとせず、怯えていたのがよくわかりました。それから日本での治療の可能性を検討し、検査のため2000年3月に2週間の来日、本格的な治療のために2000年9月から6ヶ月間の日本での滞在。そして、今回が3回目の来日でした。2回目の滞りが終わった時点で、今度は自宅で面倒を見ようと思いました。資金的な問題もありますが、責任を持ってサポートするには近くにいないとできないと痛切に感じたからです。

この3回目の来日のとき、ベシアナは治療のための日本滞在であることを知りませんでした。前回はがんばったご褒美に日本に招待されたと思ってきたのです。でも、治療を受けるとわかったときのベシアナは「やっぱり・・・」という感じでした。手術のため入院する前にコソボの家族に電話しました。ベシアナはその電話にでて、泣いて泣いて、ずっと泣いていました。でも、この電話以降、ベシアナは絶対に電話に出ようとしませんでした。これから、長い治療に臨むベシアナの覚悟だったのかもしれない。組織拡張器を頭皮の下に入れる手術を9月18日におこない、10月の初めに退院。我が家での生活が始まりました。決して広いとはいえない我が家です。一部屋をベシアナ親子の部屋にして、その間私たち夫婦はリビングを使用しました。シェフシェットは日本語を覚えようと毎日単語帳を持って歩き、新しい言葉を知ると書き込んでいました。我が家には、10歳の男の子(晃)と8歳の女の子(友)がいます。ベシアナは6歳でしたから、10歳、8歳、6歳とちょうど兄弟が増えたような感じでした。家の中は、日本語とアルバニア語が入り混じった会話が飛び交っていました。壁には、日本語の漢字と読み方のローマ字、アルバニア語、そしてアルバニア語の読み方のカタカナが書かれたものが貼られていきました。お風呂は、友の役目。妹がほしかったせいか、よくベシアナの面倒を見ていました。(ケンカもよくしました)。お風呂の中では、1から10までをベシアナが日本語、友がアルバニア語で言うようになっていました。晃はシェフシェットとよく遊んでいました。また、シェフシェットは、私の夫とお互いにアルバニア語日本語を教えあっていました。前回は、週3回通院していましたが、今回は私が自宅で消毒をするということで、週1回、組織拡張器に生理食塩水を注入するときだけ通院することになりました。我が家から病院までは、約1時間半かかりましたが、2人とも病院に行くときは朝ちゃんと起きて間に合うように通院できました。組織拡張器に生理食塩水を注入するとき、かなりの痛みがはしるのでしょーう……。それはそれは、すごい声で泣き叫びました。でも、絶対に逃げ出すような事はしませんでした。どんなに泣いても暴れることもありませんでした。ベシアナの「直りたい」という強い意志を感じたものです。

一番大変だったのは、食事でした。日本食になれてくれるだろうと安易な気持ちでいたのですが……。ベシアナには栄養をつけてもらわなくてはなりません。来日したとき身長はありましたが、体重は日本の同じ年齢の平均値の15%減でした。ベシアナもシェフシェットも、ご飯ではなくてパンにしてほしい、というので無理に日本食を出すのはやめました。慣れない場所

での生活です。食事だけでも2人がなるべく食べなれた味のものを作るように心がけました。自分の家族のために日本食(我が家はご飯、味噌汁が中心です)、ベシアナ親子のためにパンとスープ、おかずを作る毎日になりました。パンはフランスパン、毎日親子で4~5本食べていました。(でも、大半はシェフシェットだったような・・・!)栄養のバランスを考え、ベシアナが食べるものを・・・でも食べてくれなくてイライラすることもありました。泣けてくることもありました。ある時、子どもたちと一緒に作ってみようと考えました。コロッケを子どもたち3人に作らせてみたのです。ほとんど、ドロ遊びのような感覚でこねくりまわし、自分の食べる分だけ作らせました。始め「作らない」と言っていたベシアナも晃や友の楽しそうな姿を見て、「やる!」。手についたポテトをなめてみて、目がキラリ!これは食べるなと思って、ベシアナに「食べる?」と聞くと「食べる」。今まで食べなかったコロッケなのに、自分で作ったコロッケはペロリ! それからは、私も力が抜けて、食事を用意することができるようになってきました。

とにかく何処に行くにも一緒でした。晃や友の授業参観にも行きました。夫の実家へも私の実家にも一緒に行き、家族同様に過ごしました。ベシアナ親子が特に気に入ったのはスーパー銭湯でした。我が家はみんなお風呂が好きで、月に1回くらいの割合で近くにある露天風呂やジャグジーやサウナがあるスーパー銭湯に行っていました。もともと、裸になってお風呂に入る習慣のなかった2人ですから、初めて行った時には本当に驚いていました。でも、すぐに慣れて、ベシアナは日本語で「オッキイオフロイコウヨ」とよく言っていました。

このような生活の中、シェフシェットは週に一度くらいの割合で、コソボに電話をしていました。母親のフェティエはいつもベシアナの声を聞きたがっていました。でも、ベシアナは絶対に出なかったのです。泣いてしまうから、という理由でした。それが年末が近づいたある日、自分から「デンワスル」と言ってきたのです。電話をかけたベシアナはいきなり「モシモシ、ベシアナダヨー」と日本語で話しかけていて、こちらでは大爆笑。電話にでたフェティエはびっくりしたことでしょう。それからは、いつも電話にでるようになりました。泣くことはありませんでした。むしろ泣いているフェティエに一生懸命声をかけていました。ベシアナの成長を感じたときでした。

治療は順調に進み、2月手術の日となりました。手術の前日に入院。検査を受け、いよいよ手術の時間になりました。この手術は、主治医の吉本先生、そして熊本から吉川先生が来てくださり行われました。この手術のとき、ベシアナは今までに無いほど泣きました。病室を出る前から大泣きだったのです。一体どうしたんだろうと私は不安を覚えました。しかし、手術は順調におこなわれました。術後の経過も順調。手術前の不安は消し飛びました。抜糸をし、包帯が取れたとき、額の上まで髪の毛の生え際がきていることを鏡で見たときのベシアナの得意げな顔。それはそれは、とてもうれしそうな顔でした。

3月25日、ベシアナはコソボへの帰国の途につきました。成田には支援者の方々も見送りに来てくださり、涙の別れ?と思ったのですが、ベシアナはうれしくてうれしくて満面の笑み。それに反して大泣きだったのは、シェフシェットと私の夫でした。晃もベシアナが見えなくなってから、上着をかぶって泣いていました。友はベシアナと同じで、またね!という感じです。本来なら私がコソボまで送っていかなければならなかったのですが、どうしても時間がとれずに伊丹知子さんに一緒にいってもらいました。

大変長くなりましたが、今回のベシアナの生活の報告とさせていただきます。と思います。

改めて、本当に多くの方々にご支援をいただきましたことを心からお礼申し上げます。  
「ベシアナちゃん緊急救援コンサート」を開いてくださった音楽家の方々、コンサート委員会の方々、ベシアナをコンサートやおまつりに招いて下さった方々、ベシアナの体調を整えてくださったり、野菜を持ってきてくださったりとサポートして下さった方々、募金活動などで支えてくださった方々、ベシアナを常に見守って下さった方々、また、たくさんの方々がベシアナのために寄付をしてくださいました。そして、ベシアナの治療を受け入れてくださいました東京衛生病院、「ベシアナちゃんを助ける会」のみなさま、本当に本当にたくさんの方々に支えられて、大きな愛を受けて、ベシアナは素敵な笑顔の女の子になりました。  
最後になりましたが、ベシアナを自宅で面倒見ることが何もいわずに受け入れてくれた家族、遠く離れていても常に私をサポートしてくれた友人に心から感謝します。  
本当にありがとうございました。  
まだ、ベシアナの治療は続きます。あと1回、耳の形成手術のために来日する予定です。どうか今後もよろしく願いいたします。  
ベシアナはみなさんから愛されて、その愛を回りに示すことの出来る少女に育つと思います。  
みなさまのご支援ご協力ありがとうございました。

感謝をこめて。

2003年11月

ベシアナちゃんを助ける会  
事務局 橋本 笙子  
(ADRA Japan)